

令和7年5月

大学自己点検・評価委員会

本学学部生を対象に開講している数理・データサイエンス・AI 教育プログラムについて、取り組みを推進できているかを点検・評価するものである。

評価項目1. プログラムの履修・修得状況

本プログラムの履修者数、修了者数等は教務部において把握している。また、履修期間中にあっては対象科目の履修者出席状況を各学部教員が確認できる体制としている。数理・データサイエンス・AI 教育強化拠点コンソーシアムが提示する「モデルカリキュラム（リテラシーレベル）」に準拠した授業を展開した科目において、履修者数・修了者数及び学修成績分布等により、授業実施状況、出席状況、成績評価及び基準等について分析を行い、全体の理解度を検証する。なお、本科目は必修科目であることから履修状況については問題ないが、修得状況（単位取得状況）については全学教務委員会が状況を報告し、学生の履修指導につなげることとしている。なお、本プログラムにおける令和5年度の履修率は99.3%であった。また、履修者に対する修了者率は約91.9%であった。

科目名	学科	履修者数（履修率）
コンピュータ基礎演習Ⅱ	文学部	199（100%）
	芸術学部	71（100%）
	栄養学部	77（100%）
	スポーツ科学部	184（97.9%）
コンピュータ基礎演習	経済学部	177（99.4%）
ICT活用教育概論	教育学部	47（100%）

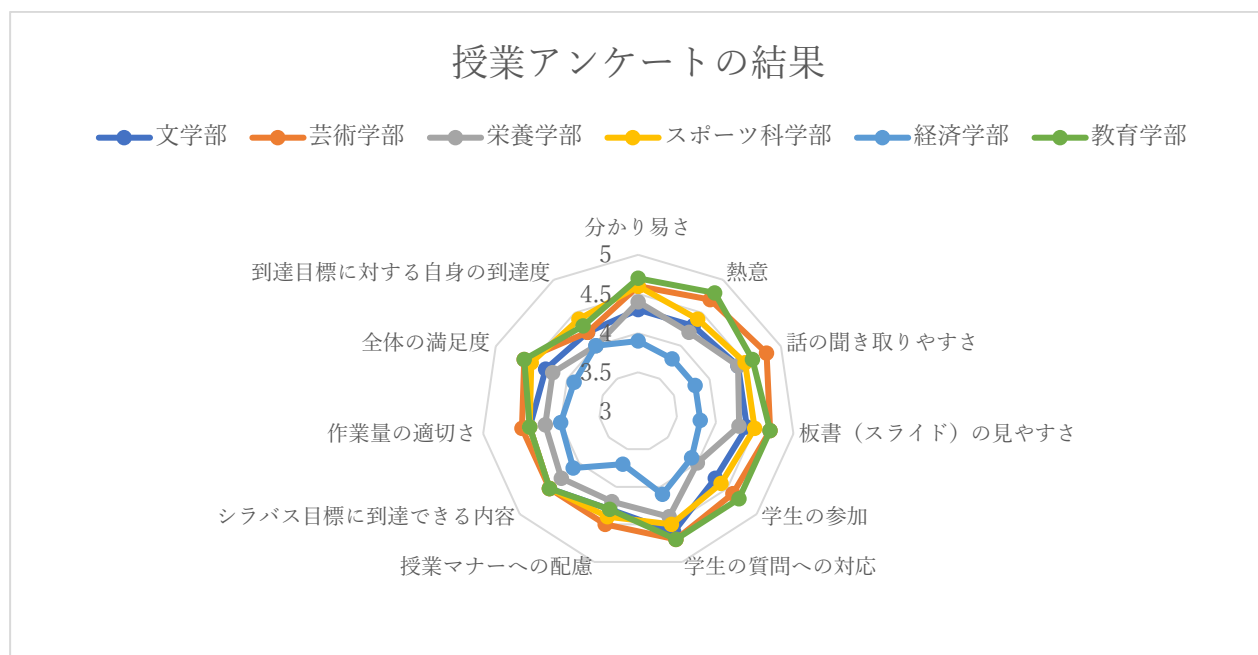
評価項目2. 学修成果

数理・データサイエンス・AI リテラシー教育プログラム対象科目において、各科目の履修者の成績評価をもとに学修成果を把握している。これらのデータは教務部および各学部の教務委員会が収集し分析を行った上、全学教務委員会にてとりまとめる。この分析結果をもとに検証し、全学的に行われている授業改善アンケートにより寄せられた学生の意見・要望も参考とすることで教育プログラムの改善を図っている。また、本教育プログラム対象科目ではそれぞれにLMS上に課題等を置いているが、これらコンテンツに対する回答内容・状況についても今後検証を実施し、学部を越えて横断的に担当教員が共有できる体制を整備し、授業改善に活かすこととする。

科目名	秀	優	良	可	不可	その他	修了者数 (修了者率)
コンピュータ基礎演習Ⅱ（文）	54	24	45	46	5	25	169 (84.9%)
コンピュータ基礎演習Ⅱ（芸）	3	18	35	13	0	2	69 (97.2%)
コンピュータ基礎演習Ⅱ（栄）	1	7	41	27	0	1	76 (98.7%)
コンピュータ基礎演習Ⅱ（ス）	31	64	59	27	1	2	181 (98.4%)
コンピュータ基礎演習（経）	43	36	27	49	16	6	155 (87.6%)
ICT活用教育概論	10	18	8	8	1	2	44 (93.6%)

評価項目3. 学生アンケート等を通じた後輩等他の学生への推奨度

本プログラム対象科目である「コンピュータ基礎演習Ⅱ」「コンピュータ基礎演習」及び「ICT活用教育概論」は、いずれも卒業要件の必修科目であることから後輩等他の学生への推奨を特に必要としないが、学生が回答した授業改善アンケートに対する「教員コメント（学生へのフィードバック）」を担当教員へ伝えることにより、授業改善の駆動力としている。



評価項目 4. 全学的な履修者数、履修率向上に向けた計画の達成・進捗状況

本プログラム対象科目である「コンピュータ基礎演習Ⅱ」、「コンピュータ基礎演習」及び「ICT 活用教育概論」は、令和 5 年度より全学必修科目として実施することとなり、令和 6 年度の履修を終えた全学履修率は 71.7%であった。（令和 6 年度開設の情報工学部については、令和 7 年度に応用基礎レベルを申請中。）全科目が必修となった際の履修者が 4 年生となる令和 8 年度に全学の履修率は 100%となるよう計画している。今後も、全学必修科目として継続してプログラムを実施する予定としている。

評価項目 5. 教育プログラム修了者の進路、活躍状況、企業等の評価

当該プログラムにおける本授業科目は、令和 4 年度より内容を改訂し開講されているため、当該授業を修得し単位を修得して卒業した学生をまだ輩出していないが、卒業後、就職支援部と協力しながら、卒業後の追跡調査を実施する等、修了者のキャリアステップや活躍状況の把握に努めることとする。

評価項目 6. 産業界からの視点を含めた教育プログラム内容・手法等への意見

まず本学教育へ反映させることを目的とし、卒業生の就職先へのヒアリングにより、本学の教育に期待することや産業界で求められている資質・能力、本学卒業生に対する満足度等の情報収集を行う。令和 6 年度のアンケート結果では、求める人物像として、積極性などの前向きな姿勢・意欲、明るさや思いやりなどの社交性・人柄、自立などの自己管理・主体性が多くあげられていることから、具体的な知識や技術だけでなく、授業に取り組む姿勢や態度等も合わせて育んでいく必要がある。

そして、企業との教育コンテンツの共同開発等を通じて、産業界からのニーズの把握に取り組むこととし、卒業生の就職先に対するアンケート調査により、本教育プログラムの評価・改善サイクルを構築することとする。

評価項目 7. 数理・データサイエンス・AI を「学ぶ楽しさ」「学ぶことの意義」を理解させること

各学部の専門分野におけるデータサイエンス・AI の事例を積極的に取り扱うことで、自身の専門分野とのつながりを認識させ、数理・データサイエンス・AI を学ぶ意義の理解を促すこととする。また、知識の共有・定着化を図るため、グループワーク・ディスカッションを取り入れ、学生の学び合いやコミュニケーションを促進し、学ぶ楽しさや学習意欲の向上の促進に努める。

評価項目 8. 内容・水準を維持・向上しつつ、より「分かりやすい」授業とすること

全学教務委員会において、授業振り返りアンケート等の学生の意見を参考に、学生の「分かりやすさ」の観点から講義の内容・実施方法の見直しを検討する。また、ファカルティ・ディベロップメント事業として、授業振り返りアンケートの結果を授業担当教員にフィードバックし、振り返りの内容を提出させることで、授業担当教員の授業改善を促進する取り組みを行う。

評価

令和6年度は学年が進んだことで全学履修率が順調に向上した。今後も必修科目でのプログラム実施を継続し、100%の履修率を目指す。修了者の割合もわずかに増加しており、履修学生が適切に知識や技術を取得できるよう授業アンケートの結果をもとに、担当教員に授業改善を求めている。令和7年度にはプログラムを受講した初めての学生が卒業を迎えることから、産業界が求める人物像を意識しながら、LMSデータの活用、キャリア支援強化、学ぶ意義の理解促進を視野に入れて、教育プログラムを深化させていきたい。